

宇宙のゆらぎと古法墨流しの応用作品

現代美術家／博士(芸術) 中西 學

はじめに

私は作品制作において、宇宙のゆらぎや生命の根源的なかたちを現わす手法を模索した結果、日本古来の墨流しの技法に辿り着き、それを作品に応用しています。

墨流しは宇宙の原初的なかたちが生み出している波動を作品にする上で、もっとも相応しい表現方法であると考えたからです。

作品「Luminous Flux (ルミナスフラックス)」

私はここ数年来、宇宙・天文の領域から様々な刺激を受けて作品制作を行っています。

宇宙の始まりを解明(想像)することは人間の普遍的な探求心に基づくものであり、天文学もいまだに大きな発展を続けている分野であるといえます。また、「宇宙、地球、生命」は深いつながりをもって、私たちが生きている環境に影響を及ぼしていると考えられます。

そしてある時、私はNASA(アメリカ航空宇宙局)のハッブル宇宙望遠鏡が捉えた鮮明な宇宙の姿(銀河、星雲、惑星など)の映像を観てヴィジュアルショックを受けました。そこに生命の根源的な形を感じ取り、それを造形作品(絵画や彫刻)へ展開しようと考えました。

この宇宙を題材に取り組んできた作品の最新シリーズが「Luminous Flux・ルミナスフラックス」です。「Luminous Flux」とは、天文学用語のひとつであり、「光束」と訳され、人が感じる光の量(心理的物理量)を意味しますが、私は宇宙の果てから届く光をイメージし、作品制作を行っています。その光から私たちが受ける遠い記憶を表現しています(図1)。



図1. 中西 學 作品
《 Luminous Flux 54 》
H.130.3×W.194.0×D.6.0cm 2013年
ミクストメディア(木製パネル、和紙にアクリル絵具、ポリエステル透明樹脂、他)

宇宙望遠鏡が捉えた天体の姿

宇宙空間に打ち上げられた望遠鏡は、大気や天候による影響を受けないため、地上からの観測では不可能な高精細な天体の画像を撮影しています。

図2のまるで抽象絵画のような「北アメリカ星雲」は、スピッツァー赤外線宇宙望遠鏡が撮影したものです。

ほかにもハッブル宇宙望遠鏡が撮影した美しい銀河(主要な銀河の型は、渦巻銀河と楕円銀河)や木星の大赤斑(巨大な渦による縞模様)など、神秘的な宇宙の姿を様々なメディアで見ることができます。

私は、このような宇宙望遠鏡が捉えた数多くの天体画像から人類にとっての共通の原風景を想い描き、それを作品にするための模索を始めたそのことが、「Luminous Flux・ルミナスフラックス」の制作背景です。

宇宙の映像にあった連続的なゆらぎを美術作品へ置き換えるには、単なる描写ではなく、何らかの手法を導入しなければならないと考え、試行錯誤を繰り返しました。

まず初めに取り組んだのは、西洋美術のシュルレアリスト(超現実主義芸術家)の手法のひとつであるデカルコマニー(転写画)のオートマティスム(自動記述＝無意識的な表現)による試作でした。しかし、その手法では思い通りの動きを画面に創出させることは出来ませんでした。

またアメリカ現代美術のカラーフィールドペインティング(色彩が画面全体を支配する絵画技法)の手法であるステイニング(滲み込ませ法)も試しましたが、それでも、連続する形象を表わせないことに気がつきました。これら既存の方法では、求めている動きが得られませんでした。

制作方法を模索するなかで、改めて宇宙の姿に目を向けてみると、数ある銀河のひとつ「渦巻銀河」の形が、幼少期に墨汁で試した墨流しを想起させました。

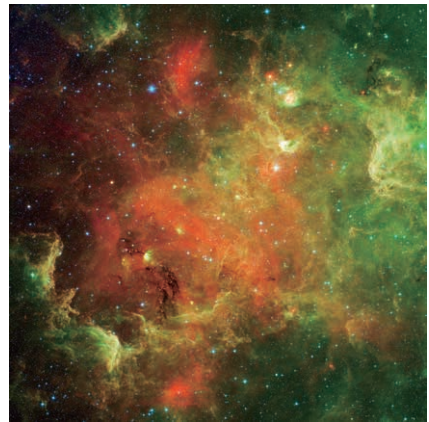


図2. NGC7000「北アメリカ星雲」
©NASA/JPL-Caltech/L. Rebull (SSC/Caltech)



図3. M83「南の回転花火銀河」
©NASA/ESA/Hubble Heritage team

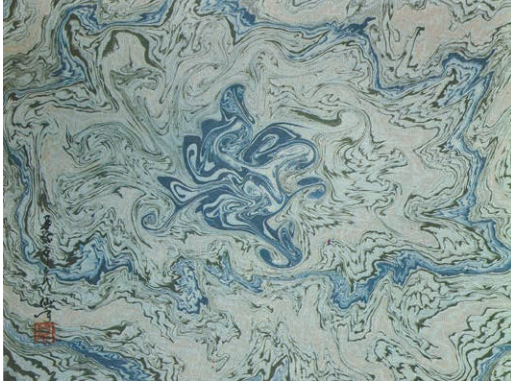


図4. 福井県武生市(現・越前市)《越前墨流し染》
 広場家五十五代目作 制作年不明
 (染織と生活第7号秋より転載)

図3のM83「南の回転火銀河」の中心から外側へ流れ、広がる様子は、古法墨流しの模様と相似しています(図4参照)。「渦巻銀河」の存在を知ったことにより、作品制作に墨流しの手法を取り入れることを思いつきました。墨流しの手法を用いることで、時間的ゆらぎが感じられる空間的形態を作品に創出することができるという確信が生まれました。

渦巻銀河と古法墨流し

ここで、墨流しの手法を作品に取り入れるきっかけになった銀河のひとつ「渦巻銀河」とは、どのような構造なのかを述べてみます。

オックスフォード『天文学辞典』によると、「渦巻銀河」は「中心部から渦巻状に広がる星、ガスおよび塵を含む明るい腕をもつ銀河。ハッブル型S。通常は、二つの腕が銀河の周りを1周以上して完全に巻き回っているが、四本腕のものや三本腕の例さえも知られている。(中略)渦巻腕は活発な星形成の場所であり、その外見を支配しているのは種族 I (星の分類のひとつ)の明るく青い大質量の若い星およびガス状のH II 領域(電離した水素が光っている空間)である。」と解説されています(図5)。

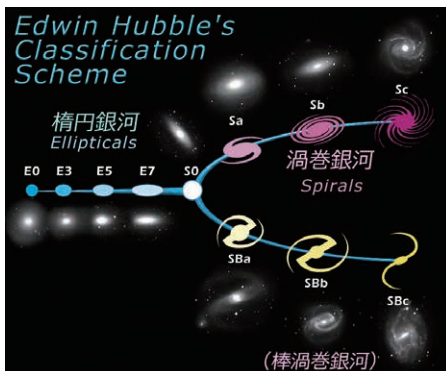


図5. ハッブル音叉図(銀河分類)
 ©NASA

この説明にある「渦巻腕」は、生命の起源を考えるにおいて重要な点が示されています。

渦巻腕は星の生誕場所であり、ガスと塵を含む星間空間になっています。星間空間には、星と星の間に、塵やガスのほか、僅かな粒子も存在し、細胞を組成する元素の炭素(C)、窒素(N)、水素(H)、酸素(O)の化合物、いわばDNAに不可欠な遺伝子の元が生成されているとい

われています。

その酸素や炭素の発生について、物理学者の村山齊氏は著書『宇宙は何でできているのか』のなかで、「宇宙に『星』が誕生し、その内部で核融合反応が始まってからのことです。」と述べています。また恒星内部でつくられた元素は、星の爆発(星の寿命による超新星爆発)と次の星の生誕を繰り返すことで宇宙に拡散し、その結果、地球にもさまざまな元素があり、星の爆発が起こらなければ、私たちの体をつくる炭素も地球に存在しなかったといわれています。さらに村山氏は「つまり、私たちの体は『星くず』でできているのです。」と宇宙と生命の関わりに言及しています。

このように宇宙望遠鏡が捉えた数多くの天体の姿を知ることにより、私は、宇宙の果てはどうなっているのだろうか、生命はどのように生誕したのかということに思いを巡らせ、作品制作に取り組み、それがやがて、作品「Luminous Flux・ルミナスフラックス」に結実することになりました。

次に、古法墨流しについて述べてみます。福井県越前市には伝統的な日本の墨流しが受け継がれています。

その墨流しは、草木染料の顔料に徹し、墨は奈良墨、藍は阿波の藍、紅は最上(もがみ)の紅花を用いることにより、平安時代後期に発生した墨流しの優雅さや面影を今に残しています(ただし当時の墨流しは墨の単色であった)。現在、平安時代後期から続く越前墨流しの後継者は、福田忠雄氏です(2000年に墨流し伝統工芸士として福井県の無形文化財技術保持者に認定)。

福田氏の墨流しの実演では、地下水を汲んだ水槽の水面に墨のほか藍や紅の染料と撥膜材(染料をはじく溶液)の松脂の付いた筆を交互に付けます。すると水面の染料と松脂が同心円状に広がり、それを何度も繰り返すと、年輪のような模様ができます。そこへ息を吹きかけ、扇子で風を送ると、まるで生き物のように染料が動き、さざ波のような模様になっていきます(図6 A、B)。

さらに、墨流しはどのようにして出来るのか、その性状について述べることにします。



図6A. 墨流しの初期模様(同心円状)



図6B. 墨流しの生成模様(さざ波)

※いずれも越前墨流し福田忠雄工房

墨流しは水の動きを利用している染色技法であり、水面にできた模様は微風や時間経過とともに変化するため、制作には慎重さと集中力を要します。また地上では重力の影響で水の浮力が抑制されるため、墨流しは水と微かな油分との反発作用により、水面に滴下した染料が浮力で残ります。その水(液体)の表面張力を応用して浮いている染料を基底材の和紙(主に鳥の子紙＝鶏卵のような色味の紙)へ写し取っています。

ところが、浮力と水の表面張力には対流が生じており、表面張力は表面温度の低い方が強く、高い温度は低い温度側へ引っ張られ、対流渦も強くなります。つまり、水は温度が高くなると粘度が低下し、流動性を増します。従って墨流しは水温が高くなると、水面へ滴下した染料の拡散が生じるため制御が困難です。このことから、染料の浮力を維持し、染料の急な拡散を抑制するために、墨流しには水温の低い湧き水や地下水のように高純度な軟水が適しているといえます。

このように、墨流しは純正な水の動き(作用)により、偶然模様を生み出す染色技法であり、全く同じ模様がつくれない一点制作(ふたつとない)の精緻な美術工芸紙(芸術性に富む料紙)です。

しかし、自身の制作に墨流しを用いたところ、墨と撥膜材で行う手法では墨流しの単なる模倣に過ぎず、また画面の奥行きと広がりを得られず何らかの工夫が必要でした。墨流しの染料は淡い色調で、その趣が墨流しの特徴のひとつですが、染色後の画面に奥行きを求められないからです。

そこで作品の画面に奥行き、すなわち空間を生み出す方法として墨流しの模様を重ねて染色してみました。線条は複雑になったものの墨流し特有の淡い色が層になるだけで、模様による前景と後景の関係にはならず、奥行きは得られませんでした。

このような方法は、伝統的な墨流しでは行われません。それは、墨流しの模様が和紙と相まって書や詩歌の装飾料紙としての用途であったからです。



図7. 透明のポリエステル樹脂にグリッターを混入した作品(部分)の表面

次いで、墨流しの模様にもーブリング(粘質の水溶液で模様を生成する、主に欧州の染色技法の名称)による染色を施してみたところ、不透明な淡い色調の墨流しの染料と透明度のある濃い色調のマーブリングの染料が、交差することで画面に奥行きが生じたのです。

墨流しと性質が異なるマーブリングの技法を用いることにより、墨流しの特徴をより一層現わすことができ得る、すなわち墨流しを補うための技法としてマーブリングを導入することになりました。

こうして私の作品は、墨流しとマーブリ

ングの染色技法を併用し、多色版画のように、あるいは色彩のフィルターを重ねるように染色し、その色彩が多層化した和紙を支持体(木製パネル)に集積させて画面を構成しています。さらにグリッター(ラメ)を混入した透明のポリエステル樹脂を画面に溶け込ませ物質感を生成させています(図7)。

なぜなら、透明のポリエステル樹脂を用いることにより光の性質を取り入れ、視覚的なゆらぎの効果を考えたからです。

このように私は、伝統的な墨流しの技法を応用し、マーブリングによる透明色、グリッターと透明のポリエステル樹脂を加え、作品を展開させています(図8)。



図8. 「中西 學・造形の世界」徳島県立近代美術館 展示ギャラリー
2015年10月14日-18日

おわりに

私の作品は、初期のロック音楽に始まり、都会の騒音、自然現象など現存する音を対象に制作をしていましたが、音を模索するなかで宇宙誕生の「ビッグバン」のような現存しない音へと関心が移り、やがてそれは宇宙をテーマにした作品につながりました。

そして、NASAの宇宙望遠鏡が捉えた天体の姿から、宇宙のゆらぎを作品に創出するため辿り着いた日本古来の墨流しの技法を取り入れ、現代美術の分野において新たな表現として位置づけたいと考えています。

著者紹介 中西 學(なかにし まなぶ)



1982年大阪芸術大学卒業後に創作活動を開始する。1985年の兵庫県立近代美術館(現・兵庫県立美術館)「アートナウ」を初め、日本各地のギャラリーや美術館で作品を発表し、高い評価を得る。1990年には大阪市の「咲くやこの花賞」(美術部門)を受賞する。近年は展覧会開催の他、大阪市立科学館など各地で宇宙を題材にしたワークショップを実施している。